第２１７回　「元気に百歳」クラブ「道草」句会開催

令和５年が始まりました。ここ数年、世界を暗くしている要因は、居すわる新型コロナウイルスの蔓延とそれへの対応であり、昨年からは、ロシアのウクライナ侵攻という暴挙が加わりました。こうしたトラブルは、短時間で解決する問題と思われず、多角度的な問題の洗い出しと、粘り強く解決方法を見つけ出すことが望まれるのでしょう。

さて、私たち俳句サロン「道草」のことです。インターネットによる通信句会の経験も活かし、投句から選句までの手順はインターネット通信で、選句以降の手順は、「新橋ばるーん」に集まり楽しんでいます。この形がようやく定着してきました。
お役目を引き受けて下さっている奥田和感さん、原晶如さん、森田多佳さん、本間傘吉さんには、感謝、感謝の毎月です。本当に有難うございます。
投句での参加のみの方を含めて、最初の句会参加の皆さんは次の通りです。
芦川創風さん、板倉歌多音さん、井上蒼樹さん、太田一光さん、奥田和感さん、
金田月草さん、君塚明峰さん、木村栄女さん、高瀬荻女さん、辻　柴楽さん、
手嶋錦流さん、中島憧岳さん、原晶如さん、舩戸清助さん、本間傘吉さん、
森田多佳さん、芦尾白然（１７名）。

本年最初の兼題は、１月２日に提示されました。兼題１「氷柱」、兼題２「白鳥」と当季雑詠の３句を詠むことでした。１月６日には皆さんの詠まれた合計５１句が揃い、本間傘吉さんのお世話で、投句一覧表が参加会員の手元に届けられました。その中の優秀句として多くの票を獲得した句を、参加メンバー名と共にご披露します。

兼題１「氷柱」

◎『青空を溶かし込んだる大つらら』	白然	天１☆13
◎『軒下に氷柱きりりと屏風立て』	月草	天１☾６
◎『朝日うけぽたりぽたりと氷柱消ゆ』	創風	天１☾２
◎『滝しぶき受けて見事な垂氷かな』	明峰	☾８

兼題２「白鳥」

◎『白鳥の白惜しみなく朝の湖（うみ）』	明峰	天１☆10
◎『大群のスワンの帰還湖（うみ）暮るる』	白然	天１☾６
◎『見つめる子大白鳥は動かざる』	多佳	天１☾５
◎『曇天の水面に白鳥際立てり』	一光	天１☾３
◎『貯水池の青き静寂（しじま）や大白鳥』	歌多音	☆10
◎『田園を翼のびのび舞ふスワン』	蒼樹	☾４
◎『白鳥の夜の重たきつばさかな』	荻女	☾４

兼題３「当季雑詠“冬・新年”」

◎『初日の出去年の憂ひを忘れさせ』	歌多音	天４☆８
◎『明くる年十年日記再起動』	蒼樹	天２☾３
◎『「元気だよ」友は認知の年賀状』	傘吉	天１☾６
◎『年明けし角打ち土間の賑はひて』	栄女	天１☾４
◎『石段の頭上に迫る初詣』	清助	天１☾４
◎『陽を集め光を溜めて冬薔薇』	明峰	☾５

兼題１では、白然の句「青空を溶かし込んだる大つらら」が、天賞一つと最多得票賞

（☆印）を獲得しました。句評として「久しぶりの青空と大つらら、透明感のある気持ちの良い句になった」との言葉をいただきました。次に月草さんの句「軒下に氷柱きりりと屏風立て」も、天賞一つを獲得しました。天賞推挙のコメントに「オノマトペ『きりり』が、冷たく鋭い感じがあり、『屏風』という言葉選びが、見事だった」とありました。景が良く見える句になっています。次に創風さんの句「朝日うけぽたりぽたりと氷柱消ゆ」も、天賞一つを獲得しました。作者は朝日に輝く氷柱の溶ける様を、オノマトペ「ぽたりぽたり」と表現しました。これは氷柱の宿命ではあるとはいえ、評者は「氷柱の持つ儚さ」と感じました。

選から外れてはいますが、明峰さんの句「滝しぶき受けて見事な垂氷かな」が、高い票数を集めました。白然が「ひと言」欄にも提案しましたように、読者には見た「場面を手渡す」という俳句の習わしに従い、中七を「ためて鋭き」とか「集め鋭き」と、客観的な写生に推敲されるのは如何でしょうか。

兼題２では、明峰さんの句「白鳥の白惜しみなく朝の湖」が、天賞一つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。湖の朝の情景、浮かぶ白鳥の白色が、訴えてくるように湖面に映えています。作者はそれを中七に「白惜しみなく」と表現し、湖の朝を見事に印象付けました。共感する多数の読者が、思わず一票を投じたのでしょう。次に白然の句「大群のスワンの帰還湖暮るる」が、天賞一つをいただきました。前句と違って夕闇迫る湖の情景ですが、壮年時代に新潟の瓢湖で見た情景を、思い出し詠んでみました。

次に多佳さんの句「見つめる子大白鳥は動かざる」が、天賞一つを獲得しました。幼い子と大きな白鳥との出会いを捉えた句ですが、白鳥は近くで見ると驚くほど大きく、一瞬、逃げ腰になることが予想されます。この子は逃げ出さなかったのか、動くことが出来なかったのか、印象的な句になりました。次に一光さんの句「曇天の水面に白鳥際立てり」も、天賞一つを獲得しました。この句は曇天の重たい空と湖面の白鳥の「白さ」との対比を詠み、読者の共感を獲得しました。白鳥の白さに明るさを見つけている句でしょうか。

次に天賞はありませんでしたが、歌多音さんの句「貯水池の青き静寂や大白鳥」が、最多得票賞（☆印）を獲得しました。この句は「貯水池の青さ」と「大白鳥の白さ」の視覚的な対比、更には静寂という聴覚的な効果も読者に訴え、多数の票を獲得しました。貯水池の静寂とは・・・神秘的でもありますね。

入賞はしませんでしたが、蒼樹さんの句「田園を翼のびのび舞ふスワン」と、荻女さんの句「白鳥の夜の重たきつばさかな」が、多数の票を獲得しました。荻女さんの句は、「夜」は「よる」ではなく「よ」と読ませて推敲してみては如何かとの提案、使われている助詞の再検討など、「ひと言」が出ていました（傘吉さんの結果まとめの末尾に「ひと言」として掲載していただきました）。

兼題３では、歌多音さんの句「初日の出去年の憂ひを忘れさせ」が、天賞四つと最多得票賞（☆印）を獲得しました。今年の初日の出は快晴で、日本を感動の渦に巻き込みました。句の中七、下五にある「去年の憂いを忘れさせ」は、その実証の一つであり、読者の多数の共感を獲得しました。天賞四つ、最多得票（☆印）は、見事でした。次に蒼樹さんの句「明くる年十年日記再起動」が、天賞二つを獲得しました。句意は、記述している十年日記が昨年で、何回目かの区切りとなり、今年から新しい十年日記の再起動の決意を述べたものです。ただ、句が三段切れにもなっていますし、上五を「明くる年」ではなく「年明くる」と動詞で止めて、リズミカルな句にすることを「ひと言」の中でも推奨されています。

次に傘吉さんの句「『元気だよ』友は認知の年賀状」が、天賞一つを獲得しました。老いの身、お仲間には、認知症と言わないまでも、これに近づく仲間も出てきます。そのあたりをユーモラスに詠まれた句でしょう。次に栄女さんの句「年明けし角打ち土間も賑はひて」も、天賞一つを獲得しました。「角打ち土間」という下町の一角にはなくてはなら

ないスペース。すっと入って一杯ひっかけていく酒屋、こうした無くなりつつある日本の文化を取り上げた句です。角打ちの情景をご存じの方には、見えていると思います。もう一句、清助さんの句「石段の頭上に迫る初詣」も、天賞一つを獲得しました。初詣となれば、参道は大勢の人で埋め尽くされ、いよいよ神殿に近い石段ともなれば、息も切れてきます。この初詣の臨場感あふれる情景に、読者は一票を投じました。

入賞はしませんでしたが、明峰さんの句「陽を集め光を溜めて冬薔薇」が、多数の票を集めました。明峰さんの前出の句「滝しぶき受けて見事な垂氷かな」で、悩まれた動詞の使い方が、この句では、「集め」と「溜めて」とが、見事に使われました。冬薔薇はまさしく陽を集め、光を溜めて咲きました。俳句では「句中で使う動詞は一つにすること」と、よく言われますが、いずれにしましても、使う動詞の適切さは、十分配慮しておけねばなりません。

前述してきましたように、今回は、「ひと言」の中に、幾つかの句を取り上げ、この句に次のように詠みかえることは如何かと、たたき台を提示して討議してみました。一つの句について作者の本音や、読者の感想を生に聞くことが出来ました。

句を詠むのに気をつけなければならないことを見つけました。それは句の中に盛り込もうとする要素が多くなり過ぎるということです。討議の中で、和感さんの句「屋根つもる深さの涙氷柱なり」が採り上げられ、上五、中七の「屋根つもる深さの涙」には、積雪の深さに対する苦労、その涙、そしてその涙が氷柱になっていることです。句中に登場させる言葉を選ぶことも大切ですね。

いずれにしましても、こうした句をより良くするための討議は省略出来ません。これからも続けることにします。二月は俳句で言えば、季題が「初春」に移ります。幾つか喜びの芽生える「季語」も浮かんできますが、これもまたスケジュールに従って、提示されることを楽しみにして、待つことにしましょう。

それでは皆さん、お元気にコロナウイルスに負けることなく「三密」に気をつけ、次の機会に元気にお会いしましょう。そして俳句を楽しみましょう。

白然記